

板絵着色製茶図



〔指定年月日〕平成一五年三月一二日
〔種別〕有形民俗文化財（信仰）
〔名称〕板絵着色製茶図
〔点数〕一面
〔所有者等〕荻窪八幡神社
〔所在地等〕上荻四一九一二

板絵着色製茶図

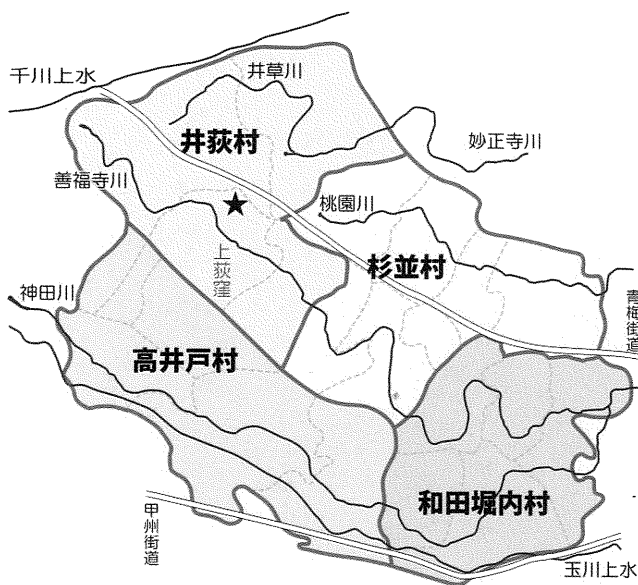
本絵馬は、杉材横長方形（全体は横八六・一cm、縦五六・四cm）で、明治一五年（一八八二）に上荻窪村の茶師世話人であった小張駒吉によって奉納されたものである。絵師名は「應需菊川口山」とあるが、詳細は不明である。

図柄は収穫した茶葉を緑茶に加工する製茶の工程と製茶に関わる茶師を描いたもので、画面左から下方にむけ「揉み」を行う三名、右下に「仕上げ」を行う一名、中央に計量、運搬の工程を行う三名の計七名の人物が描かれている。この図が描いた絵板は幅五・二cmの額縁に嵌め込まれている。

この絵が奉納された明治一〇年代から二〇年代は杉並地域でも製茶が行われていた時期であった。明治一六年（一八八三）には上下井草村では総戸数の二割ほどが製茶に従事しており、明治二十一年春には東多摩郡、南豊島郡にまたがる茶業組合が阿佐ヶ谷村の相澤喜兵衛を設立委員の一人として作られるほど盛んであった。こうした趨勢の中、上荻窪村で茶師の世話人として指導的人物であった小張駒吉によって良茶の収穫を祈願して本絵馬が奉納されたものと思われる。当地域における製茶は、規模は大きくはなかったが人々の生産意欲は強く、本絵馬の奉納は、新しい農産物にかけた農民の心情と厚い信仰心を物語るものといえる。

だが、明治末年頃になると、製茶は労銀が高く製造費がかさむことから漸次減少の道をたどり、蔬菜の栽培に替わって

【文化財所在地】



いった。

本絵馬は、明治前期において杉並農業の一翼を担っていた茶葉の生産と製茶の姿を描くもので、杉並区の産業資料として、また当時の信仰や風俗を伝える資料としても重要である。